

脚付石皿と中高石皿：関西大学博物館所蔵資料の 紹介に関連して

著者	赤塚 亨
雑誌名	関西大学博物館紀要
巻	7
ページ	137-157
発行年	2001-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/2952

脚付石皿と中高石皿

関西大学博物館所蔵資料の紹介に関連して

赤塚 亨

一 はじめに

縄文時代において一般的にみられる遺物として石皿がある。しかし石皿の研究自体は活発ではなく、時期的変遷やその性格については、まだ論議する余地は大いにある。そこで小稿では関西大学博物館所蔵（以下関大資料）の脚付石皿、中高石皿を紹介し、それらについて若干の考察を行いたいと思う。

二 研究史抄

石皿の総合的な研究は鳥居龍三氏が行ったものが先駆である（鳥居一九二四）。三形態に分類し、それぞれが用途差であると考えた。特に中高石皿については中高部（註一）を男性器、皿部を女性器とし、それらが結合した祭祀具であると解釈している。その後、大山相氏が分類を行って以降（大山一九三九）は、安達厚三氏が新たにまとめるまでみられ

ない。安達氏は石皿研究の現状を整理し、形態を五類に分類し、それぞれの時期的消長をあらわしている（安達一九八三）。しかし、それぞれの具体的資料の例示に乏しく、地域的分布も具体性に欠けるところが惜しまれる。それ以降も脚付石皿はバリエーションの一つとして、中高石皿は祭祀具としての理解が通用であった。こうしたことを受け中森敏晴氏は、脚や縁を有するものには単に製粉具としての機能ではなく、異なる利用があつたのではないかと考え、成形加工された石皿を「定型石皿」として集成し、その用途の可能性のひとつとして、容器としての皿そのものだと考えている（中森一九九一・一九九六）。

この他、澄田正一氏、植田文雄氏は石皿の実用的機能の追求により縄文時代の生産活動、植物質食物利用について的一端を明らかにした（澄田一九五九・一九六二・一九六四・一九六八、植田一九九八a・b）。また後述するが石皿の呪的側面を検討しようとする研究もある。主だった研究はこれらのみであり、他の遺物と比べると、その出土量からみて立ち遅れているように思える。

三 関西大学博物館所蔵の石皿について

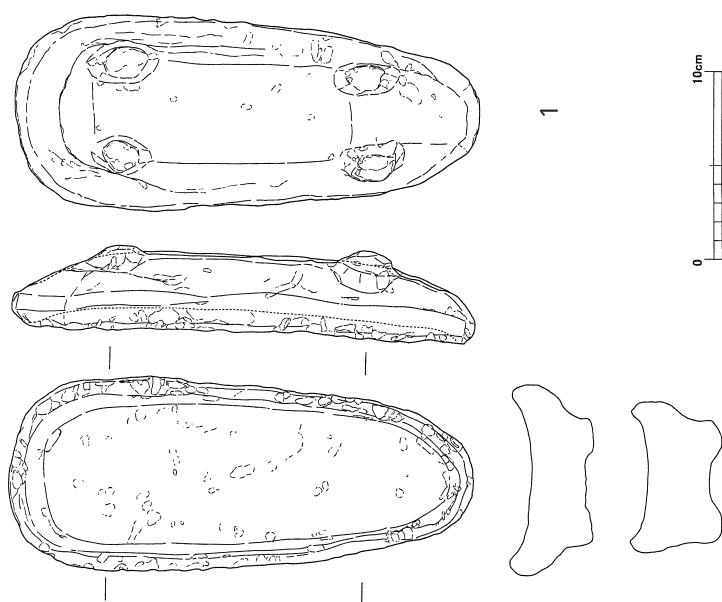
関西大学博物館所蔵品の多くは、故本山彦一氏（元毎日新聞社長）の所蔵であったコレクションで占められている。そのうち縄文時代に関しても重要な遺物が多々あるが、石皿についても破片を含め数点保管している。これらのうち脚付石皿二点、中高石皿一点がある。まずこれら三点について説明したい（第1・2図）。

1は脚付石皿である。（本山番号不明）。最大長二四・六cm、最大幅一〇・五cm、最大高四・九cm、片方の端部がすぼまる砲弾形（舟形）である。縁は垂直ではなく傾斜をもつて全周をめぐる。脚は底面との境をもつて円形に削りだされる。石材は黒灰色の安山岩で全面にわたり細かな凹凸が著しいが、皿部が広がる側の縁部の一部がタール状を呈しており、滑らかである。

2は脚付石皿である（本山番号二〇六）。1よりも大型で最大長三三・八cm、最大幅一六・八cm、最大高七・〇cm、形態は1とは異なり端部がすぼまらない長楕円形を呈し、側辺部も少し張りだす。縁は緩らかな傾斜を持って立ちあがり、脚は長軸方向に不整形な楕円形をなし、底面との境をもつて比高差はあまりない。脚の間の底面部と側面部の一部には凹凸はあるものの非常に平滑であり、成形後に磨くといった調整が行われた可能性がある。石材は黄灰色の安山岩であり、気泡ともいふべき穴が多数認められ凹凸が著しい。

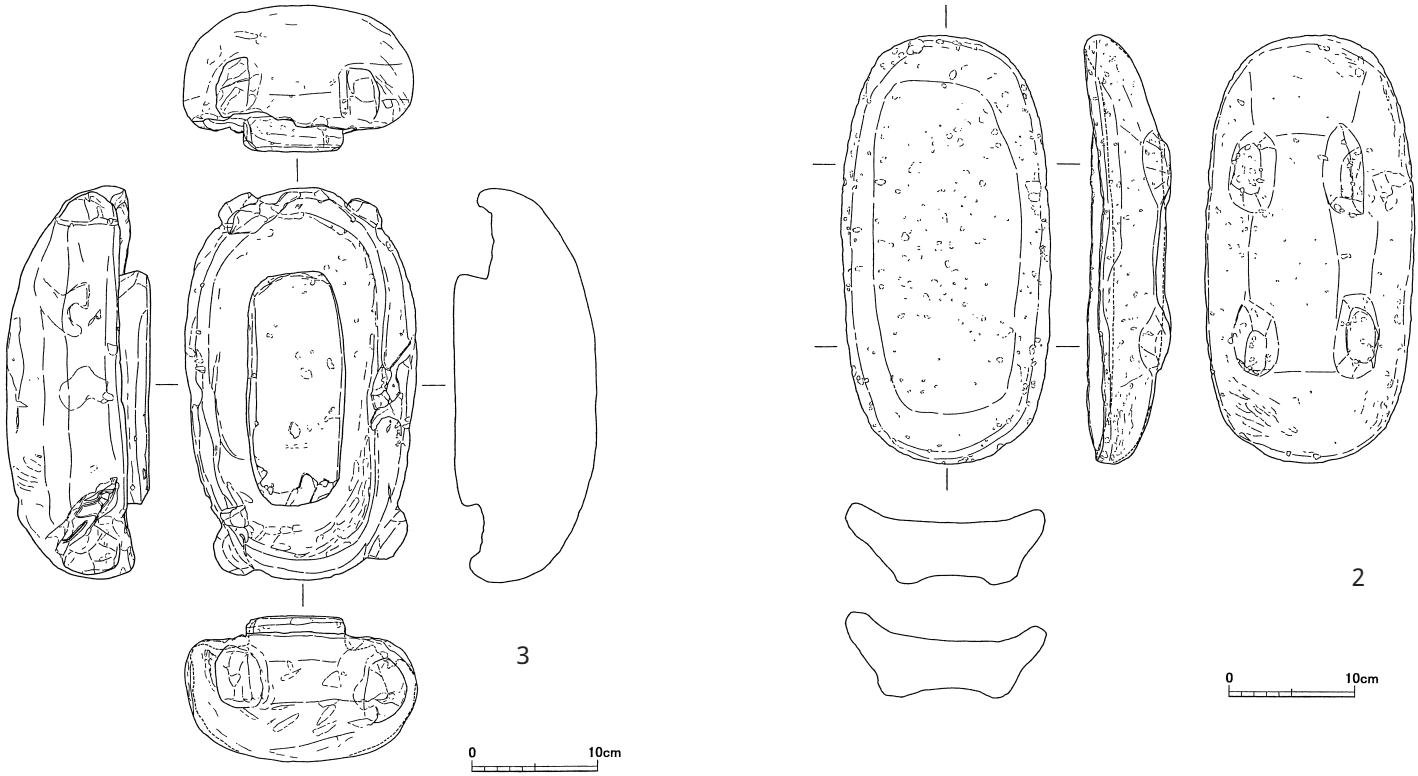
3は中高石皿である（本山番号二二二）。最大長三〇・九cm、最大幅

一八・七cm、最大高一〇・五cmである。注目すべきは両端部の側縁側に二対の突起物をもつことである。これは後にも述べるように他に類を見ないものであり、その機能が問題となろう。形態は突起を除けば楕円形であり、縁は低くなだらかに立ちあがる。底面は扁平ではなく丸みを帯び、安定性は若干悪い。中高部は上方部がやや広がる感じで立ちあがり、丸みを帯びた長方形形状を呈し、その上面は平滑である。また、まだらに



第1図 関西大学所蔵資料1（1：4）

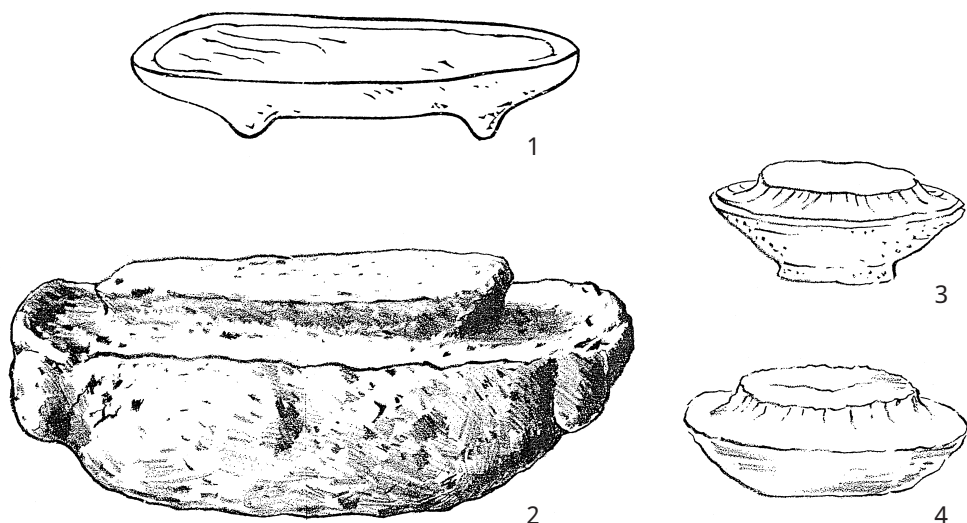
第2図 関西大学所蔵資料2・3(1:6)



	種別	形態	脚形態	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大高(cm)	重量(g)	石材	本山番号
1	四脚	砲弾形	長楕円形	24.6	10.5	4.9	1250	安山岩	不明
2	四脚	長楕円形	長楕円形	33.8	16.8	7.0	3710	安山岩	206
3	中高	楕円形	不整円形	30.9	18.7	10.5	4650	輝石安山岩	212

くぼみが存在するが敲打痕とは断定できない。周溝部でわずかながら幅五mmほどの削り痕と思われる短い数条の溝を観察できた。おそらく縁部成形時の削りだしによるものであると思われる。突起物の周縁部の一部にも削り痕が観察できた。また両小口面とも突起物の高さがずれており、視覚的な機能をもつならば上方からの視点となる。石材は黒灰色の輝石安山岩である。なお、右側縁部の中央上部と左側縁部の突起物側には、溶岩凝固時の空洞あるいは亀裂が入っている。

以上、観察所見について簡単に述べた。これらは『本山考古室要録』ではいずれも出土地不詳となっているが今回の紹介にあたり、1と3について確定はできないが出土地を『東京人類学雑誌』（以下『雑誌』）中の神田孝平氏の記述より特定しえた。それはこの本山コレクションの前身が神田氏の収集物であり、自らしばしば「淡崖」の名で氏所蔵の遺物紹介などを当会々誌にて行っているためである（註二）。第3図1については『雑誌』第二巻十号の「石器彙報」中に、石の鞋として享和文化年間に青森県西津軽郡櫻田村（現在の岩木町）の広原で発見したとされている。長さ七寸八分、幅三寸五分を換算するとほぼ関大資料1と同一の大きさで、また掲載図を見る限り、この先がすばまる砲弾形の形態から考えて、この広原発見のものと考えるとよからう。関大資料2については同様のサイズを示しているものはみられなかった。3は『雑誌』第三巻二六号に掲載されている（第3図2）。寸法は記されていないが、突起物の位置などからみて間違いないであろう。解説によると陸奥国下北郡田名部村（現在のむつ市）で発見したものであるという。またこれと共に二つの中高石皿が図示されている（第3図3・4）。これらについ



第3図 淡崖紹介資料（淡崖 1886・1888）

ては後述するが、縄文時代の所存であるならば中高石皿の初現的形態をもつものと考えている。以上、関大資料1と3については青森県出土と考えられるが、これらの時間的位置付けについては明確にはいえず、各地の形態的特徴の類似する例から、その時間的位置を考えたい。

四 脚付石皿の諸形態

今回集成した脚付石皿は脚部のみ(註三)を含め、六九遺跡、一四一点である(註四)。それらを分類する形態的特長として、まず挙げられるのが、中森氏も第一に述べるように平面形である。平面形は円形、楕円形、方形、長方形、砲弾形、不整形など多岐にわたるが、石皿の遺存状況として二分の一以下のものが多いため、平面形が不明、あるいは断定できないものが多々ある。今回はこれらを大きく楕円形のものと同方形のものに分けたが、時期的変遷や分布的偏りがあるといった現象はみられなかった。つまり形態の差異とは、岩手県の湯沢遺跡や青森県の富ノ沢遺跡など、一時期のみの遺跡内(各竪穴住居)において各形態の脚付石皿がみられるように、時期差ではなく、機能もしくは一歩踏み込んで集団の違いなど、他の諸要因から考えられるべきである。また脚の形態も多様であるが、秋田県の内村遺跡などを除き、おおよそ石皿の平面形態と相似する傾向にある。

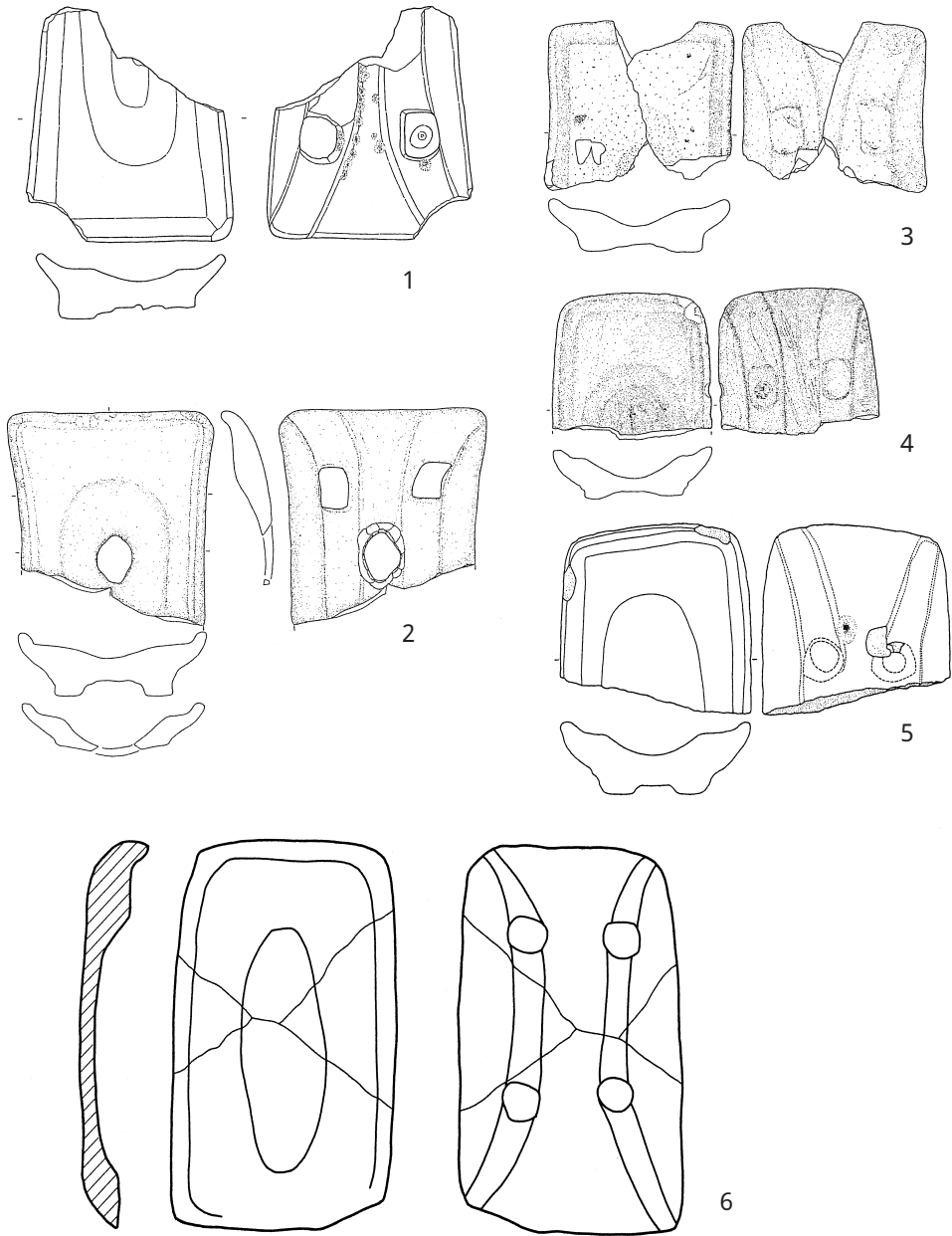
これら脚付石皿は、中期末から後期前葉にかけてのものが多数を占めるが、大多数が包含層からの出土であり、細かな時期決定はしがたく、小稿の目的である関大資料1・2の時間的位置付けについては今後の検

討課題となった。しかし、集成する中で、少数ではあるが固有の形態的特徴をもつものを類型化できる見通しをもった。つまり脚付石皿のなかには、隆帯を持つもの、皿部が窪むもの(以下凹部)、掃き出し口(註五)、肩部(註六)を持つもの、三脚のものなどがある。そこでこれらの特徴を有するものをまとめ、そこから導き出されることから考えてみたい。

榊山タイプ

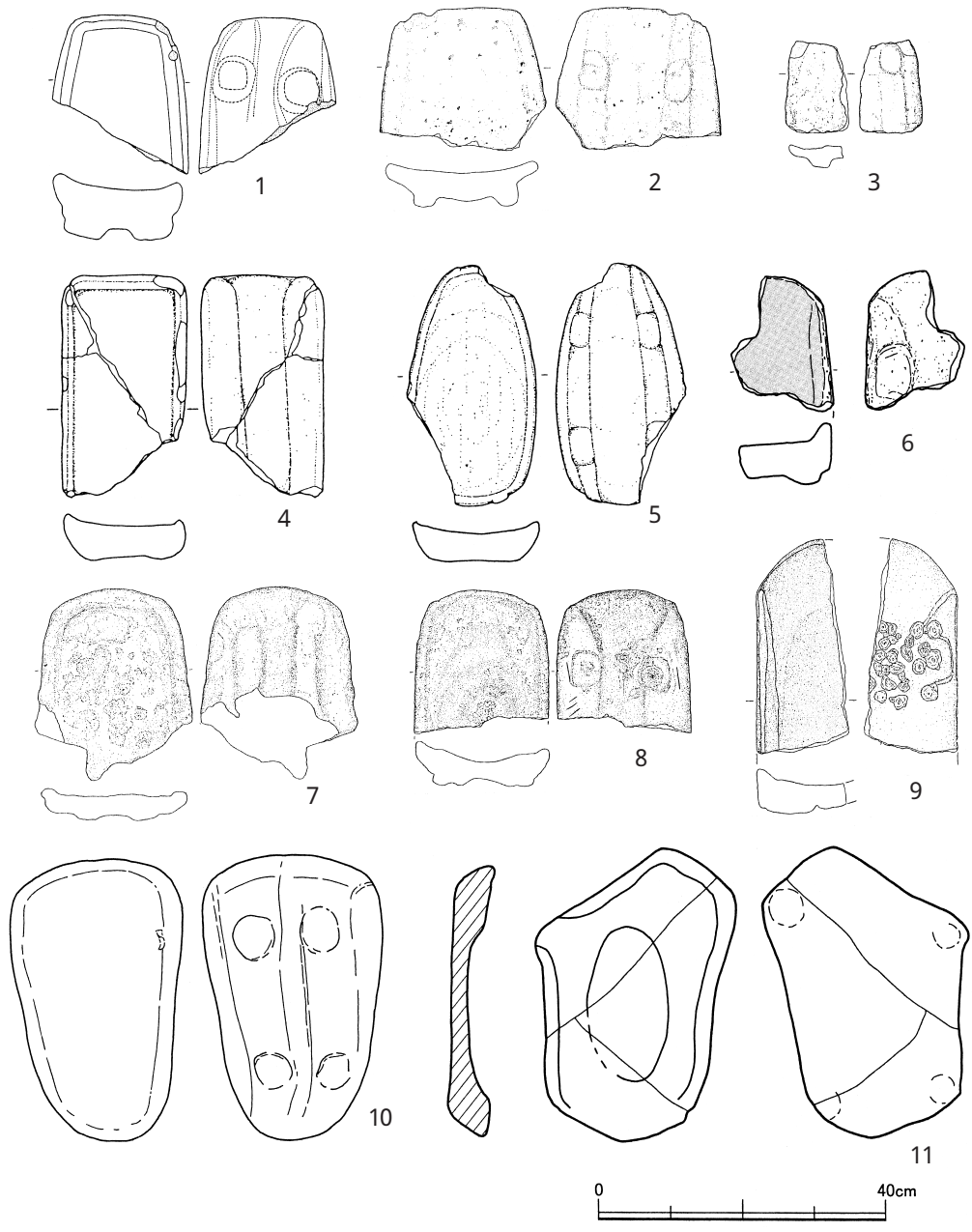
脚付石皿のなかには、隆帯上に脚をつくりだすものがある。これらは形態的特徴とその機能において他の石皿と区別されると考えられることから、今回は「榊山タイプ」と仮称したい。これは岩手県の榊山遺跡において完形で発見された石皿のなかに隆帯を施したものがあり、一九五〇年代以降これをもって石皿の一つのバリエーションとして認められてきた。その特徴とは平面形が長方形で四辺ともに縁を持ち、中央に凹部を有する。底面にはそれぞれ四隅から中央にむかって弧状を呈する二本の隆帯がある。その隆帯上に方形または円形の脚部を作りだす。また、それぞれ大型でほぼ同一の大きさをなす(小型品がない)ことも挙げられる。このことは石皿のある機能を限定しうるものとして有効な属性となる。これらは岩手県では榊山遺跡、西館跡、相ノ沢遺跡において出土し、宮城県では二屋敷遺跡、秋田県は八木遺跡で計二六出土したようであるが、図示されているものは二点である(第4図)。脚の基本形状は長方形と考えるが、榊山遺跡と八木遺跡のものは円形である。

またこれら榊山タイプの諸属性のうち若干異なるものや欠落すると考



1. 宮城・二屋敷遺跡 2. 岩手・西館跡 3・4. 岩手・相ノ沢遺跡
5. 秋田・八木遺跡 6. 岩手・樺山遺跡(再トレース)

第4図 樺山タイプ(1:10)



1. 秋田・八木遺跡 2・3. 岩手・湯沢遺跡 4・5. 青森・間沢遺跡 (位置改变)
 6. 新潟・城之腰遺跡 (位置改变) 7・8. 岩手・相ノ沢遺跡 9. 山梨・大月遺跡
 10. 長野・御堂垣内 (写真トレース) 11. 岩手・樺山遺跡 (再トレース)

第5図 準樺山タイプ (1 : 10)

えられるものを準樺山タイプとして第5図に示した。8の相ノ沢遺跡例以外は凹部をもたず、扁平に近い。また7の相ノ沢遺跡例と4の間沢遺跡例は隆帯がそのまま脚となつていものである。このことと凹部をもたないことから樺山タイプとは全く別のものとも考えられるが、今回はひとつの類型とした。8の相ノ沢遺跡例は底面中央部のみを削り出してあり、隆帯を作出していない。これは6の新潟県城之腰遺跡例、9の山梨県大月遺跡例でもみられるが、双方とも掃き出し口を有しており中部・関東の地域的様相を示している。また大月遺跡例は外面からの削り出しであり、中森氏が指摘されたように関東地方のものは脚が低いことも含め、樺山タイプの形成過程に関わつてくるかもしれない。さらに深くみると、第6図10の同じく大月遺跡出土の石皿は、半欠のため断定できないが脚が隆帯状の可能性をもち、間沢遺跡や相ノ沢遺跡例との関係を示唆させる。長野県においても藤沢村（現在の高遠町）御堂垣内発見（第5図10）とされるものがある（鳥居一九二六）。11は樺山遺跡のもので第4図6と同じく配石の一部として利用されていた。形態はまったく異なり他に例をみないが、凹部を有する点から樺山タイプと同一の機能をなすものとして考えられる。また、粉々に破碎されているが同一個体と考えられ、凹部を持たないものとして宮城県六反田遺跡例がある。

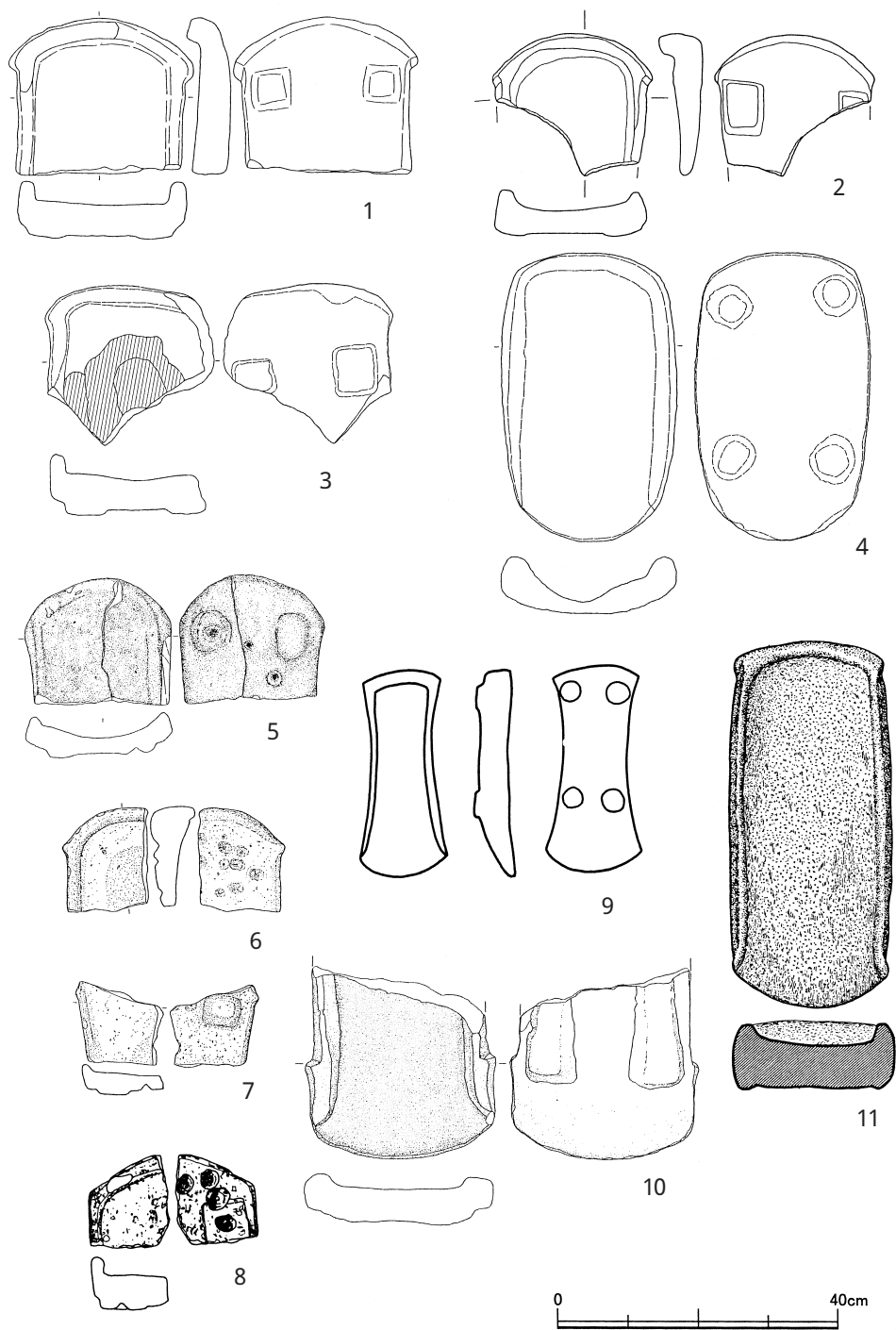
これらは中期末から後期初頭にかけての時期幅でおさまるようなので時期差と捉えることは今の段階ではできない。凹部、皿、掃き出し口という異なつた機能差とともに地域差と捉える方が妥当であろう。

掃き出し口と肩部をもつもの

次に掃き出し口を有するものについてみていきたいが、これは肩部をもつ石皿と深い関連をもつものと考えているのでまとめて考えてみたい（第6図・第7図）。掃き出し口、肩部（門部）を前後後半の段階において持つものは糸井宮前遺跡に代表されるものである。ただし脚はもたない（糸井宮前Aタイプ、第7図1）。そして掃き出し口の有無は不明だが、おそらく同様の平面形態をもつと考えられるものが長野県栗林遺跡群馬県深沢遺跡などでみられる（第6図1・2・3）。栗林例は中期後半以降、深沢例は後期中葉頃である。

いずれにせよ糸井宮前遺跡と栗林遺跡とは中期前葉・中葉にかけて時間的空白があり、また両者が決定的に異なる点は、先述した脚部のほか、栗林遺跡例の皿部が扁平な点である（栗林Aタイプ、註八）。これは後期前半の千葉県貝ノ花貝塚、埼玉県赤山遺跡などでも確認できる。逆に栗林遺跡のなかに掃き出し口はあるが、肩部をもたない脚付石皿は全面が窪む（栗林Bタイプ、第6図4）。一方、糸井宮前遺跡の肩部を持たない楕円形の石皿は扁平である（糸井宮前Bタイプ、第7図2）。つまり前期後半から中期後半にかけて、形態と機能部の転換があつたと考えられる。

ただし中期に中部地方、特に八ヶ岳南麓で盛行する糸井宮前Bタイプは、皿部がくぼんだり、扁平なままのものも存在するようである。（第7図5・6）これは糸井宮前Bタイプが日常的使用の比重を高めたためと思われる。その理由として、非日常的使用と考えられる彫刻を施したものが存在すること（註九）、そしてくぼみに程度差がみられることが、



1・3・4．長野・栗林遺跡（4の位置改変） 2．群馬・深沢遺跡 5．千葉・伊豆島貝塚
 6・7．千葉・貝ノ花貝塚 8．埼玉・赤山遺跡 9．長野・望月町内（再トレース）
 10．山梨・大月遺跡 11．長野・立沢遺跡

第6図 肩部・履き出し口を持つ石皿（1：10）

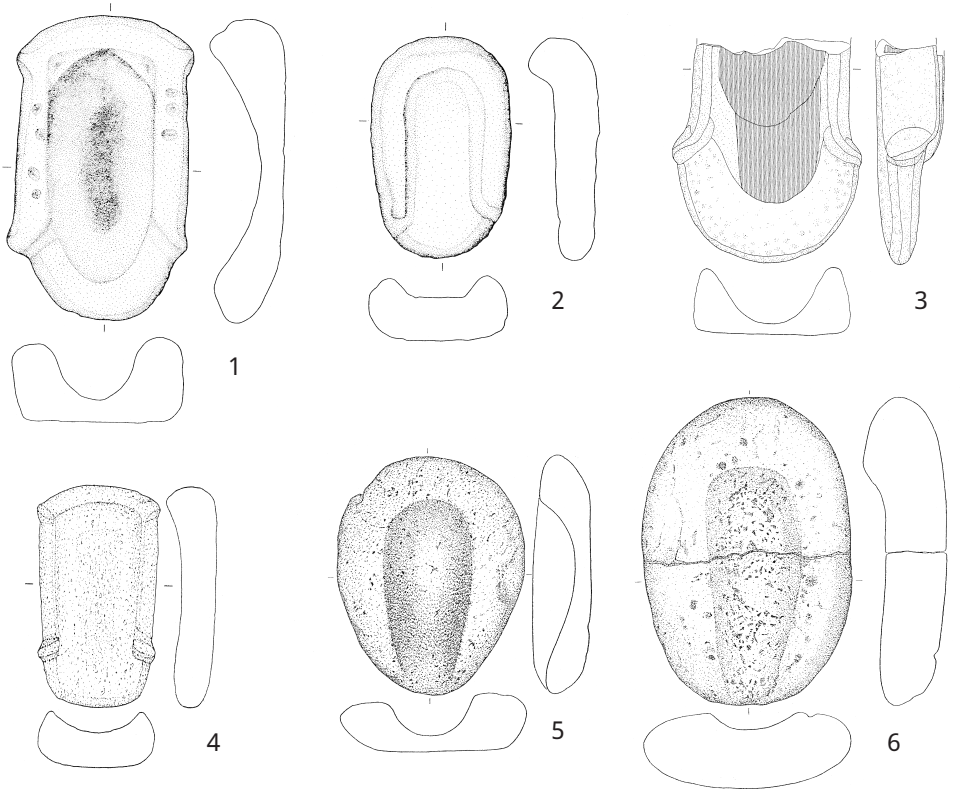
製作当初からくぼみを意図したのではなく、それぞれの使用頻度の一過程を示しているものと思われるためである。

三脚石皿と脚付石皿の出現

数例の遺跡だけでこうしたことを述べるのは心もたなく、地域差を考慮しなければいけないが、それでは脚はどの段階で出現してくるのであるうか。今回集成した中では、前期のものはみられず、山形県の西ノ前遺跡が中期前葉、中葉、野新田遺跡が中期中葉、山居遺跡が中期中葉から末葉の時期幅で収まり、山形県域において中期中葉以前に脚部をつくりだしていた可能性がある。

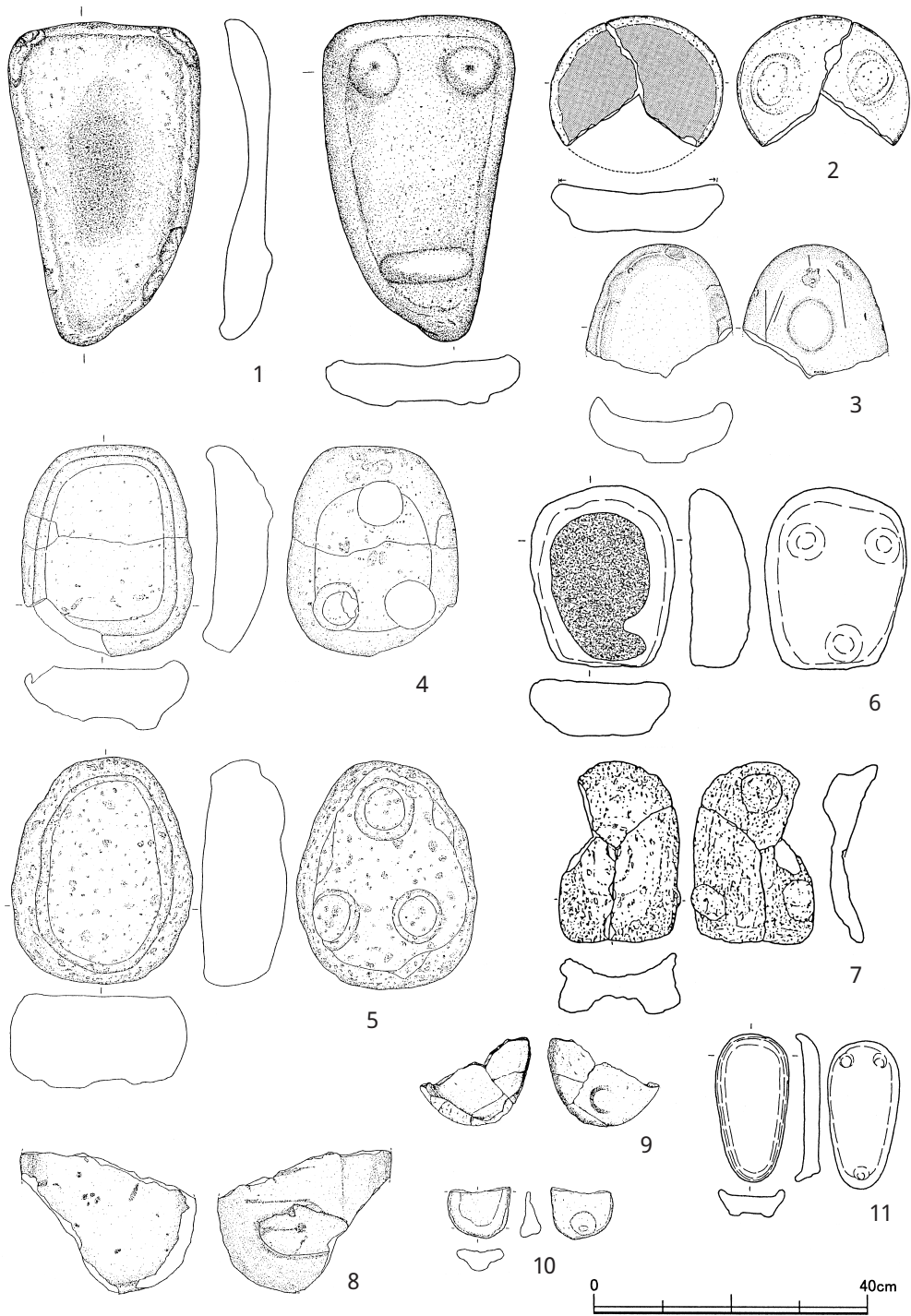
また山居遺跡、野新田遺跡においては三脚と推測される石皿も存在する(第8図3・8)。確実に三脚と分かる例は少なく、形態も一様ではない(註一〇)。これは三脚が四脚とは異なる用途で用いられたのではなく、それぞれ製作前の素材の形状に左右されていたものと思われる。つまりほとんど中期末の時期の可能性があり、この時期における脚付石皿の増加現象に生じたイレギュラータイプのものと考ええる。岩手県長者屋敷例は凹部を有しており、こうした現象を反映した一例であろう(註一一)。また、三脚石皿と榊山タイプが同遺跡あるいは同流域に存在することは、これらが近時する位置にあると思われる。

以上、脚付石皿についてそれぞれの特徴をもつものについ



1・2．群馬・糸井宮前遺跡 3．群馬・下高瀬寺山遺跡
4．長野・三田原遺跡群 5．長野・向原遺跡 6．長野・坂上遺跡

第7図 前期・中期の肩部・履き出し口を持つ石皿(1:10)



1. 岩手・長者屋敷遺跡 2. 新潟・城之腰遺跡 3. 山形・野新田遺跡 4・5. 宮城・菅生田遺跡
 6・11. 青森・富の沢遺跡 7. 宮城・六反田遺跡 8. 山形・山居遺跡（方向改变）
 9. 岩手・叭屋敷遺跡（方向改变） 10. 宮城・山田上之台遺跡

第8図 三脚石皿（1：10）

てまとめ、私見を述べた。また集成した脚付石皿のうち後期中葉以降のものはほとんどみられなかった。青森県尻高遺跡のものが後期後半段階に比定され、安達氏の見解のとおり東北北部のみに限られていくようである。ただし晩期と明言できる資料はなく(註一一)、代わって登場するのが中高石皿であると思われる。

五 中高石皿

中高石皿の出現に関しては、安達氏は後期中葉ごろより底面が丸みを帯びたものが出現し、晩期になつて底面が扁平なものが出現するとしているが、先にも触れたように実際どの資料を指しているのか不明なため、変遷過程に疑問をもたざるを得ない。今回集成することができた点数は三二点だが図面を転載したのは一六点のみである(註一三)。これらもまた時期が明確に分かる例は少ないが、ほとんど晩期の所存である可能性が高い。しかし、これらは晩期という時期幅の中で、その形態的特長から変遷が追えるのであろうか。

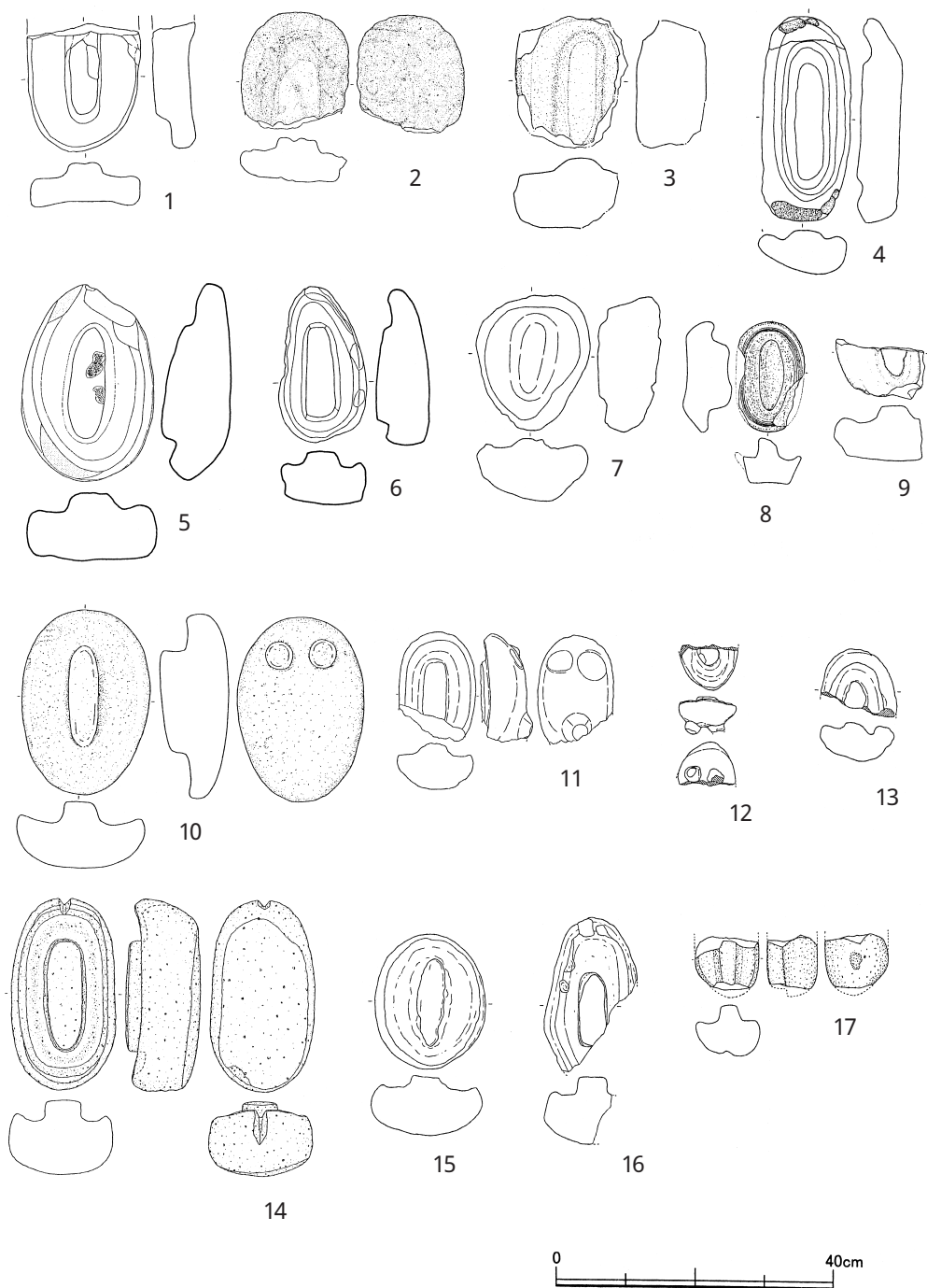
確実に時期が判明している例は、成田遺跡と大日向遺跡の晩期中葉段階、九年橋遺跡の晩期後半段階である。三者とも底面が丸みを帯びており、大日向遺跡例においては片側に脚を二脚有しており、脚を持たない方へ下降する。こうした片方の小口面に下がるものは第9図5の上ノ山遺跡、6の白坂遺跡例が該当すると思われる、岳下遺跡例は脚付きで傾斜するようである。また是川遺跡の四脚のものは、片側一對の脚が短く、やや下降しているようである(保坂一九七二)。これは機能面にお

いて実用品であると仮定して考えると、中高部、もしくは周溝部において粉碎されたものや液体状のものを収集しやすくするためのものと考えられる。そう考えると成田遺跡例にみられる片端のV字状の切れ込みは、一種の注ぎ口として理解できる。また底面が丸みをおびることは叩く・磨るといった作業時における水平面の確保と、作業終了後の粉碎物もしくは液体を収集させる機能を兼備させた最終段階のものとして想定する。そう考えると底面が扁平なものは前半段階に位置付けられよう。先述した神田孝平氏記載の二点の中高石皿(第3図3・4)が、初現的形態を持つと考えたのもこうした理由と、他では確認できない円形の平面形態を呈することからである(註一四)。

分布については時期が確定できる資料数が限られているためその推移は伺えないが、青森、秋田、岩手のそれぞれの水系を単位としたまとまりをもつ。特に泉山遺跡を除き是川遺跡、大日向遺跡、水系は異なるが大芦遺跡は脚をもつという点で、地域的まとまりとして捉えることができるかもしれない。また脚付石皿もそうであるが、ほとんど内陸部の遺跡に出土するということは、それぞれの生業の在り方を含めて今後検討されるべき課題であらう。

以上のことから、関大資料3について考えると、晩期でも中葉以降のものと考えられる。また突起については、脚の退化したもの、紐(縄)掛用(註一五)、北海道でみられる錨石との関連(杉浦一九八八)など考えられるが決め手となるものはない。類例の増加を期待したい。

以上、脚付石皿と中高石皿についてそれぞれの形態的特長からその変遷を考えたのが第10図である。少ない資料から考えたため、推測の域を



1・6 . 秋田・白坂遺跡 (6 の位置改变) 2 . 岩手・相ノ沢遺跡 3 . 秋田・家ノ後遺跡
 4・7 . 青森・泉山遺跡 5 . 秋田・上ノ山 遺跡 (位置改变) 8 . 岩手・貝鳥貝塚
 9 . 秋田・上猪岡遺跡 10 . 岩手・大日向 遺跡 11 . 岩手・大芦 遺跡 12・13・15・16 . 岩手・手代森遺跡
 14 . 岩手・成田遺跡 17 . 岩手・九年橋遺跡

第9図 中高石皿 (1 : 10)

でないが今後の石皿研究の叩き台になれば幸いである。

六 石皿の呪的性格について

さて石皿には実用的機能のほか、石皿自体を呪的性格をもった第二の道具として考える意見がある。例えば平出一治氏は多くが壊されて出土する状況から、あるいは鈴木保彦氏は配石遺構や土壙墓などから強い相関関係をもって出土することから、石皿の呪的性格を認め、検討を行っている（平出一九七八、鈴木一九九一）。筆者も今回の集成により、こうした出土例が多数存在することは認める。特に欠損品があまりにも多いため形態の比較は困難であった。しかし、こうした出土状況から短絡的に呪具・祭祀具として結びつけてよいのであろうか。確かに土偶や石棒などと伴出した例が多いが、これはこうした祭式儀礼の際にのみ供される食物との関係で考えられるべきではなからうか。こうしたことを解明する手掛かりとして、脂肪酸分析が期待される。例えば大月遺跡での脂肪酸分析の結果は興味深い。第6図10の脚付石皿はイノシシ、ニホンジカなどの血液、脳、神経組織、臓器などの部分からの脂肪、そして加工されていない扁平な石皿は鳥の卵やイヌ、タヌキに由来する脂肪という結果がでている（小林ほか二〇〇〇）。これは石皿がその形態によって調理・加工する対象を使い分けていたことを示唆する（註一六）。

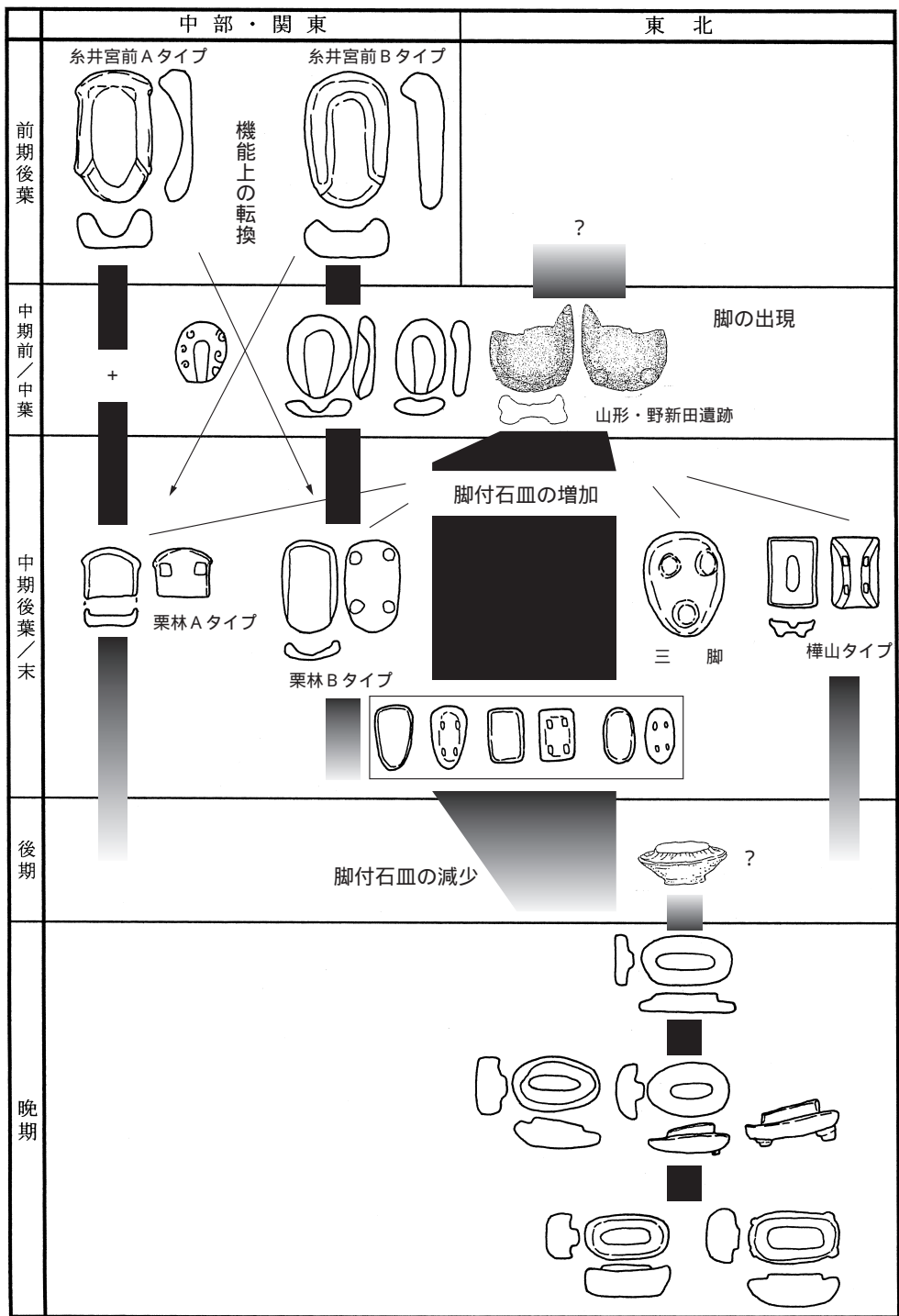
また破碎されたり、墓壙中より検出されたりすることは、石皿の所有者という理解から解釈できるのではなからうか。つまり石皿にはあらかじめ、ある集団内で所有者が限られており、その人物の死によってその

機能も終え、破碎されるということである（註一七）。墓から出土することはそうした所有者であるか否か、または中森氏が考察されているように配石墓においては転用・再利用と考えるほうが妥当である（中森一九九五）。

中期末における脚付石皿の増加現象や、脚付石皿を祭式儀礼の際に食されるものの調理、もしくは盛り付け用の皿として解することは、縄文時代の祭式構造に新たな知見を与えてくれよう。筆者は後期後半から晩期初頭にかけて脚付石皿は減少し、中高石皿に代わっていくものと考えられる。また樺山タイプにみられた凹部は、例えば晩期の是川遺跡においては、不整形な扁平の石皿にみられる。つまりこれらのことは、後期から晩期への祭式構造の変容の一端を示しているのではなからうか。

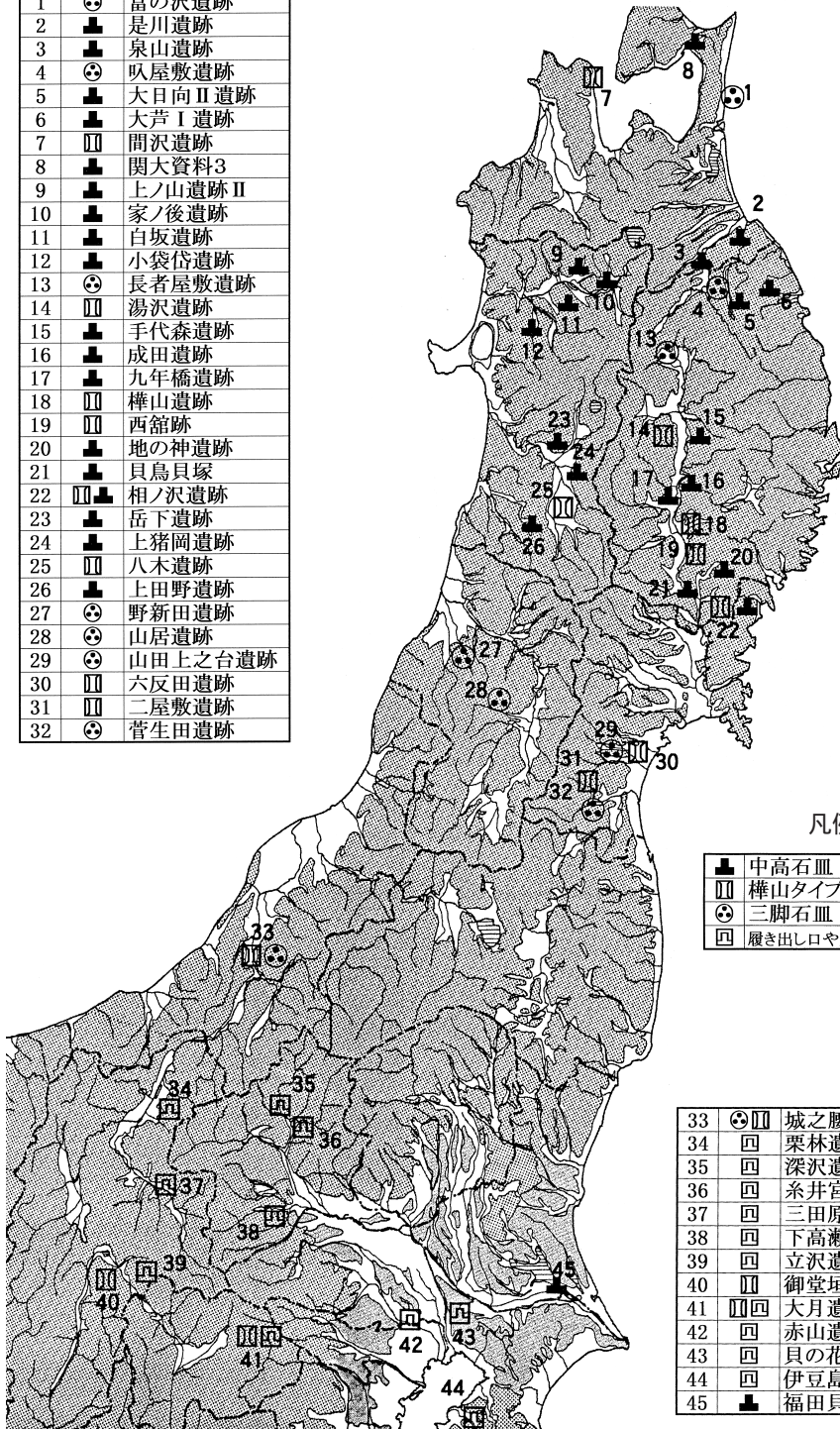
石皿は全国的に出土する遺物であり出土量も少なく、縄文時代の生活復元について多くの可能性を秘めていると考えられるが、他の遺物と比べその研究は少ない。また実測図の表現や展開図について統一性がなく、共通の理解を妨げているといえよう。石皿の形態や報告者の考え方にもよるであろうが、一度そうした議論もなされるべきである。また磨石から石皿と絡めて対象物の検討をし、縄文時代の生産活動を論じる研究もあり（小林一九七八）、今後は伴出する磨石も考慮にいれなければならぬだろう。

小稿を成すにあたり、文献収集等について上杉彰紀、北山峰生、丹野拓、山下大輔ら各氏のご助力を得ました。記して深謝します。



第10図 脚付石皿・中高石皿の変遷模式図（縮尺不同）

1	☉	富の沢遺跡
2	■	是川遺跡
3	■	泉山遺跡
4	☉	吠屋敷遺跡
5	■	大日向Ⅱ遺跡
6	■	大芦Ⅰ遺跡
7	▣	間沢遺跡
8	■	関大資料3
9	■	上ノ山遺跡Ⅱ
10	■	家ノ後遺跡
11	■	白坂遺跡
12	■	小袋岱遺跡
13	☉	長者屋敷遺跡
14	▣	湯沢遺跡
15	■	手代森遺跡
16	■	成田遺跡
17	■	九年橋遺跡
18	▣	樺山遺跡
19	▣	西館跡
20	■	地の神遺跡
21	■	貝島貝塚
22	▣	相ノ沢遺跡
23	■	岳下遺跡
24	■	上猪岡遺跡
25	▣	八木遺跡
26	■	上田野遺跡
27	☉	野新田遺跡
28	☉	山居遺跡
29	☉	山田上之台遺跡
30	▣	六反田遺跡
31	▣	二屋敷遺跡
32	☉	菅生田遺跡



凡例

■	中高石皿
▣	樺山タイプ
☉	三脚石皿
▣	履き出しロや肩部をもつ石皿

33	☉▣	城之腰遺跡
34	▣	栗林遺跡
35	▣	深沢遺跡
36	▣	糸井宮前遺跡
37	▣	三田原遺跡群
38	▣	下高瀬寺山遺跡
39	▣	立沢遺跡・坂上遺跡
40	▣	御堂垣内
41	▣▣	大月遺跡
42	▣	赤山遺跡
43	▣	貝の花貝塚
44	▣	伊豆島貝塚
45	■	福田貝塚

第11図 脚付石皿・中高石皿の分布

註一 陸部ともいう。

註二 神田孝平氏とは幕末から明治にかけて洋学者あるいは啓蒙思想家、そして官僚として活躍し、また東京人類学会の初代会長もつとめた人物である。

註三 脚部のみとは、一脚の周りの辺が生きていないもの、一脚で側辺もしくは小口辺のどちらか一方のみ残存するものとする。

註四 短期間による集成のため、見落としが多々あると思われる。地域ごとの集成・検討が望まれる。文末報告書を参照されたい。

註五 掃き出し口とは小口辺の片方の縁が存在しないものをいう。

註六 肩部とは縁の角部が突起状に張り出した部分をいう。また側縁部と掃き出し口の境目にあたる張りだし部分を、今回は便宜上、門部とよびたい。

註七 配石遺構からの出土であり、転用と考えるとその時期以前にさかのぼる可能性はある。

註八 貝ノ花貝塚のように栗林Aタイプのもので脚部を有しないものも存在する。新潟県では飯綱山遺跡、長者屋敷遺跡、上の山遺跡などがある。(新潟県一九八三)

註九 彫刻を施したものが、そのまま脚をつける栗林Bタイプへと変遷するかどうかは、今後の検討課題としたい。

註一〇 ただし新潟県においては、三脚の広神村出土のもの、四脚の新道島遺跡(新潟県一九八三)など脚付石皿は円形を基調とした可能性がある。

註一一 包含層からの出土であり、詳細な時期は分らないが、集落の拡大からみると中期中葉以降の可能性がある。

註一二 秋田県戸平川遺跡例は、晩期が主体を占める遺跡であるが、掘立柱

建物の根固めに利用されており、そのまま晩期に帰属させるのは問題がある。

註一三 不掲載分は『上ノ山 遺跡』本文中の小袋代遺跡、岳下遺跡、藤株遺跡、上田野遺跡の計五点、『岩手県立博物館収蔵資料目録第一集』中の地の神遺跡一点、出土地不明三点、是川遺跡の三点、福田貝塚一点、『東京人類学雑誌』第十二号掲載の狄館発見の一点である。

註一四 所在確認はしていないが、文中に3は独狐村惣三郎所蔵、4は湯船村倉神社とある。

註一五 ただし紐すれ痕などは確認できなかった。

註一六 北海道小樽市忍路土場遺跡でも脂肪酸分析が行われ、獣類・魚類の脂肪酸が検出されたという。今回は文献を入手することができなかったため検討できなかった。

註一七 この「モノの帰属・所有」に関する問題は、土器に限らず他の遺物・遺構に対しても考えることができる。モノが果たして個人・家族・集落内の集団・一定地域内の集団など、どこに所属しているかを考えることは社会復元にさいして有効な手段となる。別稿で論じた。

参考文献

安達厚三 一九八三 「石皿」『縄文文化の研究7 道具と技術』

植田文雄 一九九八 a 「無縁石皿考」『列島の考古学 渡辺誠先生還暦記念論集』

植田文雄

一九九八 b 「縄文時代における食料獲得活動の諸相」『古代文

化』第五〇巻 一〇号

大山 柏 一九三九 「史前人工遺物分類 第一鋼石器」『史前学雑誌』一一

巻一・二・三号

岡本孝之 一九七八 「住居内出土の石皿についての覚書」『神奈川考古』三

関西大学工業技術研究所・古文化財保存科学研究会 一九九〇 『関西大学

考古学等資料室所蔵 石器資料の石質調査 古文化財保存科学研究会調査

報告

木村剛朗 一九七二 「実験よりみた敲石とその用途(1)・(2)」『考古学ジャー

ナル』七四・七五

小林公明 一九八一 「後期縄文文化における沿北太平洋的要素とメソアメリ

力要素」『じるめん』二九

小林公治 中野益男 中野寛子 長田正宏 二〇〇〇 「磨石・敲石類、石

皿と注口土器の使用法に関する一事例」『山梨県立考古博物館 山梨県埋

蔵文化財センター 研究紀要』十六

小林康男 一九七八 「縄文時代の磨石」『中部高地の考古学』

末永雅雄 一九三五 『本山考古室要録』

杉浦重信 一九八八 「锚石とチヨウザメ」『季刊考古学』第二五号

鈴木保彦 一九九一 「第二の道具としての石皿」『縄文時代』第二号

澄田正一 一九五五 「日本原始農業発生の問題」『名古屋大学文学部研究論

集(史学)』一一

澄田正一 一九五九 「濃飛山地に出土する石皿の研究」『名古屋大学文学部

十周年記念論集』

澄田正一 一九六二 「木曾川流域の先史考古学研究」『名古屋大学文学部研

究論集(史学)』二六

澄田正一 一九六四 「濃飛山地に分布する石皿の機能について」『名古屋大

学文学部研究論集(史学)』三三

澄田正一 一九六八 「濃・飛・越山地に出土する石皿の研究」『名古屋大学

文学部二十周年記念論集

諏訪兼位 一九五九 「濃飛山地に出土する石皿の岩石学的研究」『名古屋大

学文学部十周年記念論集

淡 崖 一八八六 「附言(下沢保躬 石器彙報二件に対する)」『東京人

類学会報告』第二巻一〇号

淡 崖 一八八八 「第二四版図解」『東京人類学雑誌』第三巻二十六号

坪井正五郎 一八九〇 「ロンドン通信」『東京人類学雑誌』第六巻五六号

鳥居龍蔵 一九二四 『諏訪市史』第一巻

中谷治宇二郎 一九四三 『校訂日本石器時代提要』

中森敏晴 一九九二 「縄文時代石皿の形態変化における地域的個性」『史

峰』一六 新進考古学同人会

中森敏晴 一九九五 「配石内出土の石皿の呪的性格について」『帝京大学山

梨文化財研究所研究報告第六集』

中森敏晴 一九九六 「定型石皿」論 もうひとつの石皿」『考古学雑誌

西野元先生退官記念論文集』

平出一治 一九七八 「縄文時代の石皿について 壊れた石皿をめぐって

」『信濃』第三〇巻四号

平出一治 一九八七 「八ヶ岳南麓の石皿二例」『長野県考古学会誌』第五四

号

渡辺 誠 一九七五 『縄文時代の植物食』

報告書

青森県

- 青森県教育委員会 一九七四『青森県埋蔵文化財調査報告書第九集 むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報』
- 青森県教育委員会 一九八〇『青森県埋蔵文化財調査報告書第八九集 尻高(一)・(三)・(四) 遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 一九八六『青森県埋蔵文化財調査報告書第九五集 遺跡 間沢遺跡』
- 青森県教育委員会 一九八六『青森県埋蔵文化財調査報告書第九八集 弥栄平(一) 遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 一九八六『青森県埋蔵文化財調査報告書第一〇一集 沖附(二) 遺跡』
- 青森県教育委員会 一九九二『青森県埋蔵文化財調査報告書第一四三集 富ノ沢(二) 遺跡 発掘調査報告書(一)』
- 青森県教育委員会 一九九三『青森県埋蔵文化財調査報告書第一四七集 富ノ沢(二) 遺跡 発掘調査報告書(一)』
- 青森市蛭沢遺跡発掘調査団 一九七九『蛭沢遺跡』
- 八戸市教育委員会 一九九三『八戸市埋蔵文化財調査報告書第六〇集 八戸市内遺跡発掘調査報告書六』
- 八戸市教育委員会 一九八六『八戸市新都市区域内埋蔵文化財調査報告書 丹後谷地遺跡』
- 青森県教育委員会 一九九五『青森県埋蔵文化財調査報告書第一八一集 (第一分冊) 泉山遺跡』
- 保坂三郎 一九七二『是川遺跡』

秋田県

- 秋田県教育委員会 一九八一『秋田県文化財調査報告書第八二集 内村遺跡発掘調査報告書』
- 秋田県教育委員会 一九八四『秋田県文化財調査報告書第一一九集 東北縦貫自動車道発掘調査報告書』
- 秋田県教育委員会 一九八九『秋田県文化財調査報告書第一八一集 八木遺跡発掘調査報告書』
- 秋田県教育委員会 一九九〇『秋田県文化財調査報告書第一九八集 西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 高屋館跡』
- 秋田県教育委員会 一九九〇『秋田県文化財調査報告書第一九三集 国道一〇三号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 上ノ山遺跡第二次調査』
- 秋田県教育委員会 一九九一『秋田県文化財調査報告書第二〇八集 東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 上猪岡遺跡』
- 秋田県教育委員会 一九九二『秋田県文化財調査報告書第二二九集 曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 家ノ後遺跡』
- 秋田県教育委員会 一九九四『秋田県文化財調査報告書第二四五集 農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 冷水山根遺跡・寒沢遺跡』
- 秋田県教育委員会 一九九四『秋田県文化財調査報告書第二四四集 白坂遺跡発掘調査報告書』
- 秋田県教育委員会 一九九五『秋田県文化財調査報告書第二五六集 県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 家の下』

(一) 。

秋田県教育委員会 一九九九『秋田県文化財調査報告書第二九三集 伊勢堂
代遺跡』

秋田県教育委員会 二〇〇〇『秋田県文化財調査報告書第二九四集 戸平川
遺跡』

秋田県教育委員会 二〇〇〇『秋田県文化財調査報告書第三〇六集 湯前遺
跡(第二次)』

岩手県

〔財〕岩手県埋蔵文化財センター 一九七七『岩手県埋文センター文化財調査
報告書第四集 二戸市 沢内遺跡』

〔財〕岩手県埋蔵文化財センター 一九七八『岩手県埋文センター文化財調査報
告書第二集 津南村湯沢遺跡』

〔財〕岩手県埋蔵文化財センター 建設省ダム工事事務所 一九八〇『岩手県
埋文センター文化財調査報告書第一三集 御所ダム建設関連遺跡発掘調査
報告書』

〔財〕岩手県埋蔵文化財センター 日本道路公団 一九八〇『岩手県埋文セン
ター文化財調査報告書第二二集 松尾村長者屋敷遺跡(一) 東北縦貫自
動車道関連遺跡発掘調査報告書』

岩手県教育委員会 日本国有鉄道盛岡工務局 一九八〇『岩手県文化財調
査報告書第五〇集 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』

〔財〕岩手県埋蔵文化財センター 日本道路公団 一九八二『岩手県埋文セン
ター文化財調査報告書第四〇集 上の館遺跡 東北縦貫自動車道関連遺跡
発掘調査』

岩手県教育委員会 〔財〕岩手県埋蔵文化財センター 建設省ダム工事事務所
一九八二『岩手県埋文センター文化財調査報告書第三〇集 御所ダム建

設関連遺跡発掘調査報告書』

〔財〕岩手県埋蔵文化財センター 日本道路公団 一九八三『岩手県埋文セン
ター文化財調査報告書第四九集 滝谷 遺跡 東北縦貫自動車道関連遺跡
発掘調査報告書』

〔財〕岩手県埋蔵文化財センター 一九八三『岩手県埋文センター文化財調査
報告書第六六集 湯沢遺跡発掘調査報告書(遺物編)』

〔財〕岩手県埋蔵文化財センター 日本道路公団 一九八三『岩手県埋文セン
ター文化財調査報告書第六一集 吠屋敷 a遺跡 東北縦貫自動車道関連
遺跡発掘調査』

〔財〕岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 一九八六『岩手県文化振興
事業団埋蔵文化財調査報告書第一〇八集 手代森遺跡発掘調査報告書』

〔財〕岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 一九九三『岩手県文化振興
事業団埋蔵文化財調査報告書第一八七集 館 遺跡発掘調査報告書』

〔財〕岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 一九九五『岩手県文化振興
事業団埋蔵文化財調査報告書第二二〇集 上米内遺跡発掘調査報告書』

〔財〕岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 一九九五『岩手県文化振興
事業団埋蔵文化財調査報告書第二二五集 大日向 遺跡発掘調査報告書
第二次、第五次調査』

〔財〕岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 一九九六『岩手県文化振興
事業団埋蔵文化財調査報告書第二三六集 横町遺跡発掘調査報告書』

〔財〕岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 一九九七『岩手県文化振興
事業団埋蔵文化財調査報告書第二六八集 沢田 遺跡発掘調査報告書』

〔財〕岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 一九九八『岩手県文化振興
事業団埋蔵文化財調査報告書第二七三集 大日向 遺跡発掘調査報告書
第六次、第八次調査』

- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 一九九九『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第三〇六集 大芦 遺跡発掘調査報告書』
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 二〇〇〇『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第三一九集 西館跡発掘調査報告書』
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 二〇〇〇『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第三三二集 相ノ沢遺跡発掘調査報告書』
 北上市教育委員会 一九八三『北上市文化財調査報告第三五集 九年橋遺跡第七次調査報告書』
 北上市教育委員会 一九九一『北上市埋蔵文化財調査報告第三集 成田遺跡(一)(一九九一年度)』
 北上市 一九六八『北上市史 第一巻 原始・古代(一)』
 花泉町教育委員会 一九七一『貝鳥貝塚』
 岩手県教育委員会 一九五二『江刺郡稲瀬村樺山遺跡調査予報 文化財調査報告書第一集』
 岩手県教育委員会 一九五四『江刺郡稲瀬村樺山遺跡調査予報 文化財調査報告書第二集』
 宮城県 宮城県教育委員会 一九七八『宮城県文化財調査報告書第五二集 上深沢遺跡東北自動車道遺跡調査報告書』
 宮城県教育委員会 一九八二『宮城県文化財調査報告書第九二集 東北自動車道遺跡調査報告書』
 宮城県教育委員会 日本道路公団 一九八四『宮城県文化財調査報告書第九集 東北自動車道遺跡調査報告書』
 仙台市教育委員会 一九八七『仙台市文化財調査報告第一〇〇集 山田上ノ台遺跡 昭和五五年度発掘調査報告書』
- 仙台市教育委員会 日本電信電話株式会社東北総支社 一九八七『仙台市文化財調査報告書第一〇二集 六反田遺跡』
 山形県 山形県教育委員会 一九八一『山形県埋蔵文化財調査報告書第四〇集 遺跡第一次発掘調査報告書』
 (財)山形県埋蔵文化財センター 一九九四『山形県埋蔵文化財センター調査報告書第一集 西ノ前遺跡発掘調査報告書』
 (財)山形県埋蔵文化財センター 一九九六『山形県埋蔵文化財センター調査報告書第四〇集 野新田遺跡発掘調査報告書』
 (財)山形県埋蔵文化財センター 一九九八『山形県埋蔵文化財センター調査報告書第五三集 山居遺跡発掘調査報告書』
 福島県 福島県教育委員会 一九八九『福島県文化財調査報告書第二〇八集 国営請戸川農業水利事業遺跡調査報告 中平遺跡』
 茨城県 茨城県史編纂第一部会 原始古代史専門委員会 一九七九『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』
 栃木県 宇都宮市教育委員会 一九八九『竹下遺跡』
 群馬県 群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 一九八六『糸井宮前遺跡 閼越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第十四集』
 群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 東日本旅客鉄道株式会社 一九八七『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第一〇集 深沢遺跡 前田原遺跡』

- 群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 日本道路公団 一九九四『群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第一七二集 関越自動車道(上越線) 地域埋蔵文化財調査報告書第二五集 白倉下原・天引向原遺跡』
- 群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 日本道路公団 一九九五『群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第一八八集 関越自動車道(上越線) 地域埋蔵文化財調査報告書第三二集 内匠日向周地遺跡 下高瀬寺山遺跡 下高瀬前田遺跡』
- 山梨県
山梨県教育委員会 一九八九『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第四集 金生遺跡 (縄文時代編)』
- 山梨県教育委員会 建設省関東地方建設局甲府工事事務所 二〇〇〇『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第一五九集 大月遺跡第七・八次調査』
- 新潟県
新潟県 一九八三『新潟県史 資料編 原始・古代 考古編』
- 新潟県教育委員会 一九九一『関越自動車道関係発掘調査報告書 城之腰遺跡』
- 千葉県
木更津市教育委員会 一九九〇『千葉県木更津市市内遺跡群発掘調査報告書 伊豆島貝塚・宮脇遺跡』
- 八幡一郎編 一九七三『東京教育大学文学部考古学研究報告 貝ノ花貝塚』
- 埼玉県
埼玉県川口市遺跡調査会 一九八八『赤山』
- 東京都
なすな原遺跡調査会 一九八四『なすな原遺跡 1地区調査』
- 長野県
長野県中野建設事務所 長野県道路公社 (財)長野県埋蔵文化財センター 一九九四『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書一九 県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書 長野県中野市内 栗林遺跡 七瀬遺跡』
- 日本道路公団 長野県教育委員会 長野県埋蔵文化財センター 二〇〇〇『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 一九 小諸市内三子塚遺跡群 三田原遺跡群 岩下遺跡 石神遺跡 郷土遺跡 東丸山遺跡 西丸山遺跡 深沢遺跡群』
- 長野県 一九八八『長野県史 考古資料編 全一卷(四) 遺構・遺物』
- 富士見町教育委員会 一九八八『唐殿宮 八ヶ岳山麓における曾利文化期の遺跡群発掘報告』
- 茅野市教育委員会 一九八六『高風呂遺跡』
- 藤森栄一編 一九六五『井戸尻』
- 鳥居龍蔵 一九二六『先史時代の上伊那』
- 補記 類例について追記しておく。
- 大野雲外 一九一七『石皿の形式分類』『東京人類学雑誌』第三〇巻八号
- この文中には脚付石皿二点、中高石皿は宮城県河南町の一点、秋田県湯沢市において発見された四点を掲載しており、うち一点は片側のみ脚がついている。また用途については、東北地方において多く産出し、汁を食用とする山胡桃を割るためではないかと推察されている。